



予期せぬPCR検査

会長 鈴木 末一

今年の夏は例年のない異常気象である。梅雨前線が7月末ごろまで列島に居座ったかと思うと、8月になれば真夏日や猛暑日の連続。気象庁は「危険な暑さ」とまで言う。

草刈り作業が大変だ。作物たちは酷暑に耐えて成長する。1週間も間隔を空けると、畑や水田の周りの草も伸びに伸びる。連日、早朝のできるかぎり涼しい時間帯に出かけた。

そこへ、町の農家組合の出会い(水利当番)が、16日に当たっていた。ウワナベ古墳の池から2人で担当区域の水田に給水する。暑さ対策と水分補給には充分に心がけ、午前6時ごろから正午まで取り組んだ。当日も猛暑日だった。

ならやまで草刈り中に携帯電話。家から数キロ離れた在所で、耕作している水田の水が溢れているとのこと。すぐに現地へと向かう。水の処理をして帰宅。シャワーをして休息をとる。

実はここまでが、思いもよらぬPCR検査体験の前段階だ。新型コロナウイルスは、誰が感染してもおかしくない。ご参考までに続ける。

◇ 味覚や嗅覚に異常はない

◇ 2～3日後体が少し熱っぽい。体温計も微熱を示す。「熱気が体内にこもったのだろう」と思っていたが下がる気配がない。ちょうど週明けの月曜日が定期検診日だ。かかり付け医で、ここ数日の経緯を説明する。胸部X線検査を受診すると、少し影が映っているとのこと。小学校4年生の時に肋膜炎を患ったことがある。往診治療と自宅で長期の静養をし快癒した。

その体験を説明した。肋膜炎とは関係がなさそう。ごく初期の肺炎らしい。「味覚も嗅覚も異常はありません」と訴えたが、医師は「念には念をですから、保健所に連絡をとります。しばらく待っていてください」と言う。別室で待機すること30分。手続きの手順などの説明を受ける。微熱、肺炎、PCR検査を予想してしま

う。まさか新型コロナウイルスに感染してしまったのだろうか。不安になる。

医師はさっそく、奈良市保健所保健予防課への報告連絡の手続きを取る。「後は保健所からの連絡に従って、受診してください」とのことだ。不安ながら、今となっては指示に従うしかない。クリニックを後にして家路についた。途中で携帯がせわしく鳴る。午後2時30分に天理よろず相談所病院に“出頭”し、「接触外来」の診察を受けるように、との指示だ。

◇ 見慣れた光景 ◇

病院の駐車場に到着、すぐに係の方に連絡をとる。係員の方が来られ「接触外来」専用窓口へと案内された。担当医はもちろん、スタッフの看護師も全ての方々が、防護服に身を固めた厳重装備のものものしさ。TVで見慣れた光景だ。

採血、胸部CT検査、尿検査、そしてPCR検査。鼻の奥まで検査棒を差し込まれ、粘液を採取された。

その日の受診者の最初であったようだ。時間の経過とともに待合室は10数人に膨れ上がった。結果については、夕方以降になるとのこと。帰宅後、連絡の入るのが待ち遠しい。

7時過ぎに「陰性確定」との連絡。「やった！」。大きく胸をなで下ろす。とはいえ、初期の肺炎の治療をしなければならない。改めて翌日の指定された時間帯に呼吸器内科を受診、抗生物質の服用による治療に取り組むこととなった。

感染者との濃厚接触など身に覚えはない。しかし、一時は、「感染者数+1」になるのではないかと危惧した。命拾いした気持だ。

監督さんや部員たちと炎天下練習に汗した経験から、暑さには耐える体力と気力はあると思っていた。しかし、いつまでも若くはない。過信は禁物だということ肝に命じ、少しの体調異変にもより敏感でなければならない。「早期対応」「早期発見、早期治療」の大切さを今さらながら実感する。かかり付けのドクターに感謝の念でいっぱいである。